種名	ヨ　　シ Phragmites australis 				
分類	被子植物単子葉植物網イネ科	俗称	ハマオギ、ナニワグサ、タマエグサ	生活型	多年草、抽水植物
分布	世界の亜寒帯・温帯・暖帯に広く分布し、日本では北海道から沖縄まで分布する。				
形態	全国各地の湖沼や河川の岸および水湿地に大群生する代表的な抽水性大型多年草。地下茎:地下茎は桿状円柱形で直径5～20 ㎜、多数の節がある。地中深く(1m位)を横に這う水平部と、節から上方に伸びて何本かの桿を直立する垂直部からなる。地上茎(桿):桿は堅く、直立して高さ1～3mになる。中空の円柱形で、表面は無毛で滑らか。葉:葉はやや革質で表面は平滑、長さ20～50㎝幅2～4㎝位で茎にはほぼ水平につく。葉先はしだいに細くなり、先端は下垂する。花:花期は8～10月。桿頂に長さ20～40㎝の紫褐色または黄褐色の大型の円錐花序をつける。				
類似種	セイコノヨシ(P.92)は非常に背が高く、茎丈3～5mになり、稀に地上を這う茎を伸ばす。ツルヨシ(P.94)は河川の上流から中流にかけての砂礫地に多く、地下茎は地上を這って伸びる。				
生息場所	主に中・下流から河口域にかけての不安定帯の水際付近に生育し、水深1m位まで耐えることができる。低地の湿地にも多く、一般に水分を多く含んだ砂泥質の、窒素分の多い富栄養地に生育するが、発達した地下茎が地中1m位まで深く葡萄し、嫌気化した土壌まで侵入する。水生植物の中では非常に競争力が強く、生育地の水深や土壌条件により、他の水生植物と共存して種々の植物群落を形成する。				
繁殖	繁殖は種子と地下茎で行なうが、地下茎が主体。花期は8～10月。結実して穎果を作る。種子は長楕円形の胚乳種子で、長さ1.2～1.4㎜。河岸等の造成地の水際線にヨシ等を植栽する場合、波浪など水による土壌の浸食を防止するために、天然繊維からなる粗いマットが市販されている。このマットを水際に敷き、部分的に穴を掘って植栽すると、植物が根を張って土壌の浸食の心配がなくなる頃には、マットの繊維は腐って消滅する。一般に抽水植物を移植する場合は、大きな根茎の塊である必要はなく、春先ならば芽生えの1本ずつを移植しても十分根づいて急速に分蘖し、数年後には密生した群落を形成する。				
他生物との関係	①水中部の体表につく付着生物群集や、群落内に生息する巻き貝などの働きを通して、有機物の分解、栄養塩類の吸収など、水質の浄化に寄与している。②ヨシ等が生える浅水帯は、魚介類、トンボなどの産卵や、幼体の生息の場として重要であり、生活史の一時期または全期間を通して、その生活をヨシ等の水生植物帯に依存している種も多い。③ヨシ原の水辺ではバン、ヒクイナ、ヨシゴイなどが、陸上ではオオヨシキリ、セッカなどが繁殖する。④チャバネセセリ、ヨシツトガ、ヨシカレハなどの食草である。				
配慮のポイント	①ヨシ原は生物の生息空間だけでなく、水辺景観の構成要素として重要視されている。改修工事にあたってはヨシ原を残存させる工夫だけではなく、積極的な造成についても配慮することが望ましい。②ヨシ原の管理については、①保護の対象となる動物の生活史に基づく作業期間の立案、②作業を小面積ごとにに行なう、③動物の生存のための必要面積を確保する、の3点に留意する。③オオヨシキリなど鳥類の繁殖期である5～6月に、ヨシ原の草取りを行なうことは避けることが望ましい。④ヨシ原の遷移の進行防止のために火入れをする場合、動物の生息域の保全に留意し、全面焼き払いは避け、作業区間を区分し、その何割かの区間を残す				
引用文献:『川の生物図鑑』を改変					